

平成 18 年 10 月 7 日

北関東会場

於：シムックス

中斎塾準備フォーラム 講話

中斎塾フォーラムは大きい流れとして、「知足」という考え方を明確に持っております。日本の国全体に「知足」の考え方を広げたい、大きなうねりを創り上げていきたいという考え方が一番根幹にあります。

それが全体目標です。

それに参加をして戴く個々の方は、それを進める上において、ご自分一人ずつの判断基準を我がものとして戴きたいというのが、次の切なる願いです、

個人個人において、家庭・会社・地域・社会それぞれの動きの中で、困る事が多々あると思います。

その場合に判断の三原則<本質・大局・歴史>の 3 つの視点でみると、非常に判断がし易くなる上に、ぶれないと考えています。

ですから具体的な事例を通じて、それぞれの方が判断基準を我がものとして戴くようになって欲しいと思います。

これが個々の具体的な目標になります。

本日は皆様に体験して戴く内容はレジメに書きましたとおり、陽明学、今の日本・これからの日本、素読の体験の三つです。

最初に素読の体験をして戴くと良いかと思えます。

お配りしてあるものは「三学」です。

安岡先生は「三学戒」と付けて、世の中に紹介されています。

これを素読させて戴きますので、皆様も一緒にお願いします。

素読をする場合には三つルールがあります。

- 1．背筋を伸ばす
- 2．目線を定める
- 3．気持ちの良い声を出す

以上の三点を努力してみましょう。

「少くして学べば、壮にして為すあり。壮にして学べば、老いて衰えず。老いて学べば、死して朽ちず。」

目標を定める時、自分の身の回りの出来事や目先の問題に意識が集中している時は、パワーが少ない。

下を向いて声を出した時は、人間の身体を構成している細胞の活性化がなされない。

目先の処理にかまけていると、パワーができません。

それがだんだん目線を上げてきて、将来に向かって目線を定めるとパワーは増大します。

素読は、どんな古典でもよいのですが「良い言葉だな」というものが発見できたら、第一段階は通過です。

第二段階になると、良いと思う言葉を暗記してしまうようになります。

言葉が身体に沁み込み、それが暗記できた段階になると第二段階を通過したと思って下さい。

第三段階になると、困った問題が起きて判断しなければならない時に、その言葉が自然と浮かんできて、判断する時のヒントになります。

そうすれば第三段階を通過したと考えて良いでしょう。

かなり練達してくると、とんでもない状況が起きた時、頭が真っ白になった時に、ふっと浮かんで来るようになれば完全に合格点です。

最後の段階は、血肉になっているから言葉はもう出て来ません。

何を基準にして判断したか、頭の中に浮かんでこないくらい血肉に化していれば最高です。

中島敦の『名人伝』が、その最高の境地を言っているものだと思います。

「三学」も、良いと思ったら、どうぞ深く読み込んで下さい。

我々は今、「壮にして学べば、老いて衰えず」というところだと思います。

注意しなければならないのは、文字からだけの学ですと、間違えます。

体験をして、自分にとってどういうものかを考え抜く時に文章を見ると、ふっと腑に落ちます。

では陽明学の話を致します。

陽明学はご存知の通り、儒学の中の一分野の学問です。

日本の国を形作っているものとしては、「中」という考え方があります。

「中」という思想は、神道が骨格だと最近つくづく思います。

その大きな骨を支えてきたものは、儒学の「中」の思想であり、道教の「中」の思想、仏

教の「中」の思想・・・こういった東洋の知恵が混ざり合って、もともと神道の中にある「中」に相互作用し、掛け算で日本人の心の中に入っていったような気がします。

儒学の中で、学び方として朱子学が生まれ、朱子学に対抗して陽明学が生まれました。

その陽明学は日本に来て花が開き、明治維新の時に定着したと思います。

私共が学んでいる陽明学では、佐藤一斎が非常に大きな比重を占めています。

佐藤一斎から連綿として続いている学縁を受けて、陽明学の基本的な流れの中に我々はいるので。

陽明学の歴史的な流れの中で我々は学んでいるのだとお考え下さい。

今外務大臣を留任している麻生さんが総理大臣になると、陽明学というものがもう少し表面化してくるのではないかと思います。

なぜならば麻生太郎さんは、佐藤一斎の孫娘のコトが徹底的に教育した吉田茂さんの孫ですから、学縁と同時に血縁もあるわけです。

DNAとは相当なものだと最近つくづく感じます。

DNAを意識して日常の行動を決めるのと、そうでないのは、かなりの差があると思います。

DNAは、阿頼耶識という考え方と一致しています。

ですから阿頼耶識を真剣に考える事は、DNAを考える事になり、自分の行動を決めていく大きな構成要素になるのだと考えます。

「陽明学とは何ですか？」と人から聞かれた場合、一言で言えば**行動哲学**と答えれば良いでしょう。

それを陽明学の中の言葉で言うと、「知行合一」です。

「知行合一」は、「知るは行いの初めにして、行は知るの成れるがなり」。

「知っている」という台詞は、どうしても体験しなければ分かりません。

先日中斎塾フォーラム理事の石崎先生が亡くなりました。

知行合一で申しますと、私は石崎さんが危篤であると連絡を戴いて、全部放り出して駆けつけました。

という事は、行動したのです。

行動した事によって、私はまさか彼が亡くなるとは思ってませんでしたので、最後の亡くなる寸前に会って話が出来たという事は、私にとって大変な宝物になりました。

おっ！！と思った時に、すぐに行動に出られるかどうか。

行動する事の大切さを感じました。

二点目は、亡くなったと聞いた瞬間にすぐに行って、亡くなっている石崎さんの手に触って脈を押さえてみて、＜実際に人間が亡くなるという事はこういう事なのだ＞というものを身体で実感し、同じ年の人間でこれだけ頑健な人間が亡くなった時、後に残った肉体がどういうものになるのだというのをしみじみ感じました。

これも体験です。

表情を見ると、穏やかで極楽浄土に行ったような顔をしていました。

人間が亡くなる瞬間には、耳の後ろからあるホルモンが出て穏やかな顔にするという事を以前から聞いていましたが、本当に穏やかな顔になっていたと思いました。

葬儀社の方も驚くほど、お化粧も何も施さないにもかかわらず、穏やかな良い表情でした。

そういう肉体に実際に触って、声をかけて、言葉に出せない何ものかを吸収しました。

これは言葉で聞いたものとは全然違う沁み込み方でした。

やはり魂はあるのだという感じがしました。

声にはならないけれども、石崎さんはそこにいるという感じがしました。

それは行動する事によって体験できたものです。

同じ体験をした者には伝わるけれども、話で伝えたものは言葉にするとどうしても変わるのです。

ですから世の中には、言葉にすると意味が変わってしまう、文章にすると伝わらなくなるという事があります。

先ほど詩吟を若干ご披露させて戴きましたが、言葉で伝わらない、文章でも伝わらないけれども音楽（人体をそのまま楽器に変えた時）は、伝わるものがあると最近強く思うからです。

これらは全部体験してきた事によって生まれてきたものばかりですから、体験したものを裏付ける意味で、陽明学という学問で検証したわけです。

そうしますと神道で言われているもの、仏教で言われているもの、道教で言われているものと検証すると、一つ一つなるほどなと腑に落ちる部分がある。

陽明学を私共が学ぶについては、行動を重視する学問なのだという事を、徹底的に心の中に、身体の中に沁み込ませて戴きたい。

行動する事が第一で、それを検証する意味で文章・言葉で紹介していくのだという基本が、身体の中に叩き込まれる事によって、行動は変わってくる。

判断基準を自らのものにするのに、より吸収が違ってくるとお考え戴ければ有難いと存

じます。

では最後に、今の日本・これからの日本についてお話しします。

今の日本をどのように見ればよいか・・・。

経済の面で考えます。

今の日本の国は、収入はいくらなのか、支出はいくらなのか・・・。

非常に大雑把に申しますと、今の収入は 50 兆です。

支出は 80 兆です。

当然足りませんね。

ここで問題なのは、新たに借金をするのが 30 兆です。

今までの借金が返せないから、借り替えなければいけません。

そういったものが積み積もって、全部で借金は 1000 兆になっています。

これが国の実態です。

これは表に言われている部分であって、その他に特別会計があります。

会社で考えますと、5 億円の売上げの会社があるとします。

5 億円の会社であれば、適正規模の借金は月商の 3 倍くらいでしょうから、大まかに考えて 1 億円くらいでしょう。

ところが売上げが 5 億円で、累計 100 億円の借金があるのです。

こんな会社は、生きていけるはずがありませんね。

それが今の日本の国の実態です。

尚且つ国民に「国債を買って下さい」と言うのですから、騙していると同じですよ。

よく考えてみると、個人も会社も税金を払っています。

しかし国は払いません。

これもまやかしです。

日本の国は、儲かっている企業が逃げ出さないように色々な事を考えます。

もちろん財政破綻をしたなら、お金は差し押さえられます。

というふうにして考えると、国というのはいったい何の為にあるのかと思わざるを得ません。

国民から税金を戴いて、皆さんの安全を守りますと謳っていますが、日本人が日本の国に住んでいて、外国から来た人間に娘を拉致されて、それが取り戻せない。

これが国でしょうか。

そうすると国を選んでも良いのではないかと

国家という概念を変えても良いのではないか？

或いは国家という概念を変える時期に来ているのではないか、という気が致します。

政治面から見ても経済面から見ても、今の国家や世界を動かしている概念が行き詰まりだと感じます。

しかもこれは非常に大きな揺れです。

さてそうなると今の日本は、日本だけが悪いのではない。

他の国々も皆悪い。

南北問題あり、経済の格差あり・・・そういうものを考えると、これからの日本は自衛しかありません。

自衛手段をとるためには、地球という惑星の中で、どういう仕組み・体制で人類は生き延びられるのかという事が一番の原点だと思います。

そこから、資本主義という仕組みが良いのか、社会主義が良いか、又は全然違う仕組みがあるのか・・・という事を考え出していく事になります。

私はどうしても<足るを知る>という考え方に行き着くのです。

これから、知足主義を理論的に構築していかなければならないという切迫感を感じます。

知足主義を大きな長期目標として置いて、個々の目の前の状況では、今の日本に住み続けることを前提とした仮説を考えなければいけません。

今の日本に住み続けるために、どのようにして生き延びるのか。

日本の国はどのような政策をとるだろうか。

そう考えると、ネバダレポートが役に立つし、IMFのものの考え方、IMFを構成している国の考え方が役に立ちます。

自衛手段は、社会主義国に参考になるものがあります。

働かなくても食べていけるのですから。

細かな対応策については前回申しましたので、基本的な対応については、具体的に話が進んだものについて色々と申し上げていけば良いと思います。

日本の目の前でみると、政治家がなすべきことをしていません。

情けない事に参議院選挙に勝つためにはどうしたら良いかという論法ばかりで、大所高所に立って政治家は判断をしていないように感じられます。

20年後、30年後、もしくは100年先を見ながらの話をする政治家が生まれてこなければ、やはりハイパーインフレに向かっていくでしょう。

ハイパーインフレに向かっていくということは、食べ物を確保しなければならないとい

う事にも行き着きます。

この問題をどの程度切実に捉えるかによって、それぞれ個々の対応ががらっと変わると
思います。

命題はもう明快に出ています。

それをどの程度真剣に受け止めて、身体の中に沁み込ませるか。

その想いが行動に変わります。

阿頼耶識です。

朝に想って、昼も想って、夜また想って・・・想いがずっと重なり合っていくと、心の
貯金箱から溢れ始める。

そうすると行動に直結します。

切実に想った時に、その切実さが強いと、その人の持っている心の貯金箱は変貌します。

枠が広がりますから、その想いも巨大化してきます。

ですから、自分の持っている情報、自分の持っている判断基準によって、自分の心の貯
金箱が溢れようとするくらい溜まったのか、そうでないかを考える。

この意識をコントロールできるかどうか。

阿頼耶識の活用とは、私はここだと思っています。

陽明学で言われている「良知」は、阿頼耶識を活用する知恵だと思っています。

「良知」は阿頼耶識に直結していると私は思います。

ですから他の言い方をすると、想いを高めて欲しいのです。

陽明学における「良知」は阿頼耶識と非常に似通った概念です。

だったらそれは、行動する事によって獲得できる。

行動して考えて、行動して考えて・・・その結果また一つの文章と照らし合わせをして
腑に落ちる。

その繰り返しによって、我々はこれからの日本をどう生き抜いていくかという事が見え
てくると思います。

我々はここで勉強しておかなければいけないのは、判断基準を考える時に、それが自分
だけの私利私欲なのか、家族を守ろうとする家族意識なのか、或いは会社意識なのか、地
域の為なのか、もう少し広げた日本の為なのか、地球の為なのか・・・。

私の提案は、日本人としてどうだろうかと考えるのが、考え易いと思います。

自分の心に素直に、自分の判断基準を考えて欲しいと思います。

この後のディスカッションでは、できれば虚心坦懐に、恥をかきたいと思います。

気持ち良い話をすると覚えません。

自分が恥ずかしいと思う、苦しいと思う、困ったなと思う。

恥をかけばかくほど、身に付きます。

是非この時間は、自分自身の判断基準を身に付けるために、恥をかく時間にして戴ければ有難いと思います。

本日のお話しはこれで終了にさせて戴きます。

有難うございました。

<十牛之図> 解説

前回は「尋牛」でした。

「たづねゆく みやまの牛は 見えずして ただ空蟬の こえのみぞする」

自分の人生これでよいのか。

何をしにこの世に生まれてきたのか。

私はこれからどうやって生きてゆけばよいのか。

・・・という事を考え始める時が、まず第一段階「尋牛」だと申し上げました。

私自身を考えると、高校生の時からこういった気持ちがあったと思います。

果して「自分の人生如何に生くべきや」と、皆さんは考えると思います。

大体人は皆、中学・高校くらいの時に、何かしらそういう事を考え始める。

ただ青少年に考えても、大人になると考えなくなるのが普通のようなのです。

小さい子は「これ何？何故？」と質問攻めですから、そこらへんが「尋牛」だと言っても良いかと思いますが、自我の本質を考え始めるという事でいけば、中学・高校かなと思います。

それをずっと追いかけていくと、どこかで「見蹟」になります。

「こころざし 深きみ山の かいありて しおりのあとを 見るぞうれしき」

例えば青少年の頃は、憧れの先生を見つけます。

また良い本に出会って、常に持ち歩いて読みたいと思います。

形は変わりますが、「追っかけ」ですね。

私は木内先生にお会いした時に、“この先生は素晴らしい。この先生の弟子になりたい”と強烈に思い、お会いした当日に、お願いして弟子にして戴きました。

自分が憧れる人に会う。

素晴らしい本に出会う。

後を付いて行きたい、真似をしたい、その世界に浸りたい・・・こう思った時が「見蹟」です。

自分で「良い本があります」「良い先生がいます」と、人さまに話せるようでしたら、「見蹟」の段階に入っていると思ってよろしいでしょう。

「十牛之図」の牛は悟りです。

これは悟りに限らず、その人がどれだけレベルアップしたか、人間として深まっていく

か・・・そういった治績を自分で自覚する階段であるとお考え戴ければよい。

そうすると今自分は「尋牛」の段階か、「見跡」か、「見牛」の段階に入ったか、順繰りに考えていき、その中で自分が一番腑に落ちた言葉は何かを自問自答して戴くのに「十牛之図」が良いと考えています。

どうぞよろしくお願い致します。